

〔論文〕

金須嘉之進と「帝室附カペーラ声楽院」

－東北地方におけるキリスト教受容に関連して－

城元 智子 北原 かな子

要旨

仙台藩出身の金須嘉之進^{きすよしのしん}は、ハリストス正教徒として初めてロシア・ペテルブルグに留学した音楽家である。帰国後はハリストス正教会の音楽指導者を務める一方で、演奏・作曲・教育活動に幅広く活躍した。金須の留学は明治期の音楽留学生の中でもきわめて早く、軍楽以外の西洋音楽習得を目的とした留学としては、永井繁子、幸田延について三人目、瀧廉太郎よりも先であった。

本稿は、金須の留学に関するロシア語文献資料の紹介を目的とする。最初に日本への洋楽導入とそれにおけるハリストス正教の位置付け、またハリストス正教が東北地方から受け入れられていった経緯も簡潔に述べた上で、ウェブ上に掲載された「帝室附カペーラ声楽院」のロシア語文献を抜粋・翻訳する形で紹介する。

はじめに

金須嘉之進は、仙台藩出身の音楽家である。ハリストス正教（東方正教）¹⁾を受け入れるなかで音楽を学び、その才能を宣教師ニコライに認められてペテルブルグに音楽留学した。帰国後はハリストス正教会の音楽指導者を務める一方で、演奏・作曲・教育活動に幅広く活躍した。金須の留学は明治期の音楽留学生の中でもきわめて早く、軍楽以外の西洋音楽を学ぶ目的とした中では、永井繁子、幸田延について三人目である。しかし前者二人に比して、その留学の内実はほとんど知られることなく現在に至っ

ている。また金須の存在自体がハリストス正教会のなかでこそ知られていたものの、音楽史、あるいはキリスト教を受け入れた近代東北の歴史の中ではあまり注目されていなかったと言って良い。その一因としてロシア語史料を収集・解読する困難さからくる史料不足があったと思われる。

本稿は、金須の留学先であるペテルブルグの「帝室附カペーラ声楽院」、現在の「サンクト・ペテルブルグ国立アカデミーカペラ」について、金須の留学当時の様子も含めて紹介することを目的とするものである。最初に日本への洋楽導入とそれにおけるハリストス正教の位置付け、またハリストス正教が東北地方から受け入れられていった経緯も簡潔に述べた上で、ウェブ上に掲載された「帝室附カペーラ声楽院」のロシア語文献を抜粋・翻訳する形で紹介する。

1. 洋楽導入とハリストス正教

近世日本において禁教であったキリスト教は、開国から明治にかけて欧米諸国から来日した宣教師たちにより日本国内に広がった。特に明治五年の高札撤廃の後は、カトリック、プロテスタント、ハリストス正教など各派の活動が活発になり、洗礼を受ける日本人が出てくるようになった。よく知られているように、日本のキリスト教受容は主として各地の社会的な指導者層であった士族が中心であり、キリスト教の教えが広がるに付随して、さまざまな知識や文化もまた日本の社会に浸透して行くことになっ

た。その中の一つが音楽である。

現在の日本では、日頃親しまれる音楽のほとんどは西洋音楽の音階によるものといっても過言ではない。近世までの伝統的な邦楽は、音楽の構成自体が旋法に基づくもので、12音の平均律音階を基本とする西洋音楽とは異なる。明治期以降流入した西洋の音階に基づく音楽が浸透するにつれ、学校教育も西洋音楽が主流となり、伝統邦楽自体が身近な生活から遠のいた。したがって、異文化が接触した明治期の諸相に目を向けることは、現在の音楽の状況を考察する上でも重要であると思われる。

近代日本への西洋音楽の導入は、一般に①軍楽、②学校音楽、③キリスト教諸派の音楽の3つのルーツを持つとされ²⁾、これらについてはすでに豊富な研究が蓄積されている。特に1990年代以降、日本の初等教育黎明期にお雇い外国人メーソン³⁾が伊沢修二とともにすすめた学校音楽、すなわち唱歌教育については、その背景にあったアメリカ伝来のキリスト教プロテスタント各派の賛美歌との関連が注目されるようになり、中村理平、安田寛らにより日本の公教育におけるキリスト教の影響力が明らかにされた⁴⁾。ただしこれまで音楽史あるいは音楽教育史においてその研究対象とされて来たのは、キリスト教の中でも主としてプロテスタント諸派の音楽である。ハリストス正教についての音楽史的な研究は、特にその幕末からの黎明期については中村理平による『キリスト教と日本の洋楽』（大空社、1996）、中村洪介『近代日本洋楽史序説』（東京書籍、2003）に収録された論考があげられる。また近年の研究としては、大嶋かず路「明治期日本におけるロシア音楽受容：正教会と音楽学校の功績およびその影響関係について」⁵⁾があり、ここでは日本におけるロシアを中心とした音楽の受容が、東京音楽学校との関係性も含めて詳しく述べられている。ただし、前述したように研究の数は決して多くはない。その主な理由としては、ロシア語を中心

とする資料解読の困難さなど、語学の壁があったことは否定できないと思われる。

上述の先行研究でも明らかにされているが、ハリストス正教の影響は少なくなかった。その背景として、ハリストス正教における聖歌や音楽の位置付けがあげられる。ハリストス正教における音楽とプロテスタントなど他のキリスト教諸派の音楽とを比較してみた場合、大きく異なるのは楽器の存在の有無である。プロテスタント諸派の礼拝では賛美歌はオルガンの伴奏をつけることが多く、明治初期から宣教師はオルガンを用いて賛美歌を教えることが可能だった。参加者は慣れない音程であってもオルガンの音に合わせて歌う（声をだす）ことにより、礼拝での歌唱としては成立したものである。東北地方で比較的早くからメソジスト派の信者を出した弘前では、1874年末から伝道を開始したアメリカ人宣教師ジョン・イング⁶⁾夫人がオルガンを持参して来ており、人々はオルガンの音に合わせて歌うことができた。

それにたいしてハリストス正教の場合、礼拝における歌唱は楽器伴奏を伴わないアカペラ唱法が基本である。礼拝における聖歌は聖歌隊によって歌われ、音楽の構造も単旋律にとどまらず、四部合唱もふくめた合唱の形態をとる。それゆえに歌唱に際しては音高を正確に保つことが要求され、音楽自体もシンプルな旋律を用いるプロテスタント諸派より高度なものとなっている。さらにハリストス正教と聖歌を研究した松島純子⁷⁾によると、ハリストス正教の「聖歌」の捉え方自体がローマ・カトリックやプロテスタントとは異なるという。ハリストス正教の礼拝における聖歌とは、そのなかで歌われる言葉が神から信徒へ、そして信徒から神へのメッセージとして存在するものであり、音楽自体はその言葉を運ぶものとしての位置付けとなる。松島はニコライ師が聖歌に厳しかったこと、それは祈り全体に影響を与えてしまうからであることを指摘しているが、ニコライ師が

1861年に来日した後、信者となる日本人を中心として西洋の音楽を教えようと努力したのは、本来の形の礼拝をすすめるためにも必要だったからであろう。

明治期のハリストス正教会では、神学校、伝教学校、女学校、詠隊（唱歌）学校などの教育施設を設置したが、そのほとんどで声楽中心の教育をおこなったとされる。特に東京の学校では、希望者にバイオリンやピアノに加えて作曲・編曲技法も教えたという⁸⁾。駿河台の教会において四部合唱をする必要性から、ソプラノを育てるために女学校を発足したのは明治8年末であり、この時点でハリストス正教会の音楽はきわめて高い水準に達していたことが察せられる⁹⁾。指導者も専門的音楽家が少なかったプロテスタント諸派の宣教師に対して、ハリストス正教会の場合は高等教育で音楽を専攻した指導者がロシアから来日し、専門的な指導に当たった。そのうちの一人であるヤーコフ・チハイ（Iakov Dimitrievich Chikhai, 1844?-1887）は、東京に出て来たのち、1875年10月29日に横浜で開催された音楽会に出演してチェロを演奏するなど、公開演奏もおこなった。聖歌の歌唱指導に加えてこれらの演奏活動も含めて、ハリストス正教会の指導者たちは明治初期の日本の音楽風景を作り上げていったのである。その様子については大嶋論文に詳しく述べられているが¹⁰⁾、さらに前出の中村理平は『キリスト教と日本の洋楽』のなかで、これまで比較的研究蓄積があるプロテスタント諸派の音楽活動に対してハリストス正教会による音楽の諸活動を位置付け、時系列を簡潔に整理している。その上で、明治初期から中期にかけての洋楽の発達と地方への浸透については、文部省の音楽取調掛の唱歌教育よりハリストス正教会の活動の方が先んじていたことを指摘している¹¹⁾。

2. 東北から広がったハリストス正教

ハリストス正教が日本に受容されていくプロ

セスは、北からのルートをたどった。最北の開港地であった箱館（現在の函館）にはロシア領事館が設置され、初代駐日ロシア領事ゴシケヴィチが来日した。当時ロシア帝国でハリストス正教が国教であり、教会の暦によって決められた宗教上の義務を果たす必要があったことから、領事館員らに伴って、ロシア正教司祭も来日した。領事館付司祭として日本におけるハリストス正教布教の強い志を持ったニコライが函館に到着したのは、文久元年（1861）7月のことだった。まだキリスト教は禁教であった時代である。

ニコライは、各地から函館に来た浪人たちや戊辰戦争に従軍した藩士らと交流し、日本語に磨きをかけながら伝道に向けて備えた。この時交流した中には、国外脱出を狙って函館にいた新島七五三太、のちの新島襄も含まれる。こうして身につけた日本語を駆使し、ニコライは教えを伝えていくことになるが、明治元年に密かに沢辺琢磨を含む3人の日本人に洗礼を受けた。この沢辺を通じて仙台藩士数人がハリストス正教を受け入れ、明治4年に仙台を拠点として伝道が開始された。この仙台藩士の活動は、函館—仙台—東京を結ぶ形で展開し、明治6年に仙台に教会が設立された後は、八戸や三戸など青森県内南部地域までその勢力を拡大している¹²⁾。

これらの地域でなぜハリストス正教が広がり始めたかについては、山下須美礼が行った日本における東方正教受容の研究が参考になる。山下によると、仙台藩では、領地を支配する際に地方知行を基本とし、上級家臣に「給地」と呼ばれる知行地を与え、年貢徴収をふくめた領地の運営を任せていた。したがって、上級武士たちは自ら支配する給地の人々にたいして、文化も含めてさまざまな影響力を持ちうる立場にあった。仙台藩の上級・中級武士たちがハリストス正教を積極的に受け入れた時、その教勢が一気に広がりを見せたのは、こうした領地支

配体制も影響したものと察せられる。幕末の頃には支配体制として地方知行制をとる藩の数は限られており、俸禄として知行地ではなく蔵米を支給する蔵米知行制の方が主流だった。しかし東北地方の場合、仙台藩だけではなく、盛岡藩、八戸藩も地方知行制をとっている。これらの、仙台藩士たちが函館と往復する経路に当たる地域からハリストス正教が広がった様子については、山下須美礼の著書¹³⁾に詳しい。同書によると明治初年に洗礼を受けた日本人のほとんどは旧仙台藩士であり、旧仙台藩領と旧南部藩領を主とする地域の受洗者数は、1879年の時点ですでに2000人を超えていた¹⁴⁾。他方、同じ東北でも津軽地方はプロテスタントが広がったことから、ハリストス正教は勢力を伸ばせなかったとされる。明治8年に弘前に設立された弘前教会ののちに伝道者を輩出し、中でも本多庸一は、のちに日本で活動していた3つのメソジスト派が合同した際に初代監督（指導者）を務めるなど、キリスト教世界の重鎮として活躍したことから、同教会は「日本メソジストの母」とまで称された¹⁵⁾。その基礎を築いたアメリカ人宣教師ジョン・イング（John Ing 1840-1920）が1874年末から1878年初頭までの約3年半で洗礼を受けた数は35人だった。数の上から単純な比較ができるわけではないが、キリスト教が広がり始めたとはいえ、やはり受洗者を出すことはそれほど簡単なことではなかったのではと思われる¹⁶⁾。そしてハリストス正教が日本の洋楽受容に影響を与えたと指摘されていることは前述したが、そのハリストス正教が広がり始めたのは、仙台藩を中心とした東北の地からであり、聖歌が歌われ始めたのもまた、東北からであったことにはあらためて注目しておきたい¹⁷⁾。

3. 金須嘉之進（1867-1951）

これまで述べて来たハリストス正教経由の洋楽受容と仙台藩経由のハリストス正教受容を考

えた時、双方に関わる人物として存在するのが金須嘉之進である。以下に中村理平の著書に基づいて、金須のプロフィールを述べる。

金須嘉之進は1867年2月21日に仙台藩に生まれた。生家は中川で、ニコライの日記には「インノケンティ中川」として名前が出てくる人物である¹⁸⁾。1881年に駿河台にあった正教会の神学校に入学、デミトリー・リオフスキー（Dmitrii Livovskii, 1854-1920）に音楽を学び、1891年にペテルブルグに留学¹⁹⁾してバイオリンやピアノ、聖歌指揮法、作曲理論を習得した。金須は1894年の帰国後、ハリストス正教会の音楽指導に当たる一方で、各種音楽会に出演し、その実力を示した。明治30年に我が国の音楽団体の一つとして結成された「明治音楽会」においては、第一バイオリンを担当している。また駿河台の鈴木町の成楽舎においてバイオリン、オルガン、楽典、和声学、ソルフェージュを教授するなど民間の音楽教育に尽くす一方で、ハリストス正教会の活動においても、聖歌の編曲・作曲を行なった。慶應義塾大学塾歌（旧）、石巻女子高等学校校歌（現在の好文館高等学校）など、校歌の作曲もおこなっている。金須の門下からは古閑裕而が出ている。

明治初期の海外音楽留学生について中村理平がその著書で簡潔に整理しているが、金須の留学は、日本人としては5人目となる²⁰⁾。一人目が岩倉使節団に同行した永井繁（後の瓜生繁）、二人目、三人目は1882年に陸軍省からパリ音楽院に派遣されて吹奏楽器を学んだ古谷弘政、工藤貞次、四人目はヨーロッパでピアノ・バイオリンを学んだ幸田延である。このうち、吹奏楽器主体であった古谷、工藤の二人を除くと、本格的な西洋音楽修行をしたのは、冒頭で述べた通り、永井と幸田延であり、金須はそれにつぐ三人目となる。幸田延や永井繁についてはこれまでさまざまな研究が行われ、特に幸田延は平高典子らによって留学に関しても明らかにされてきている²¹⁾。

しかし金須に関しては、きわめて早い時期にロシアで本格的な高等音楽教育を受けた人物であるにもかかわらず、ロシア時代の足跡はこれまでほとんど知られていなかった。たとえば上記に掲げた金須のプロフィールにはペテルブルグの音楽院と記述したが、参考とした中村理平の著書や大嶋論文の記述では「ペテルブルグ音楽院」となっている。また、中村洪介も「ペテルブルグ帝室音楽院」としている。『幕末明治海外渡航者総覧』にも「ペテルブルグ帝室音楽院」となっている²²⁾。しかし金須自身の記述による「ペトログラード音楽院の憶い出」によると、「ペテルブルグ音楽院」ではなく「帝室付カペーラ声楽院」²³⁾である。ペテルブルグには当時いくつかの音楽院があったが、金須自身が留学先を書いているにもかかわらず、どこで学んだのか、学校の名称すら曖昧だったということは、その留学の内実がほとんどわかっていないということでもあろう。この「帝室付カペーラ声楽院」において、金須がどのようなことを学んだのか、またこの学校での教授内容や方法がどのようなものであったのか、その具体的な内容を知ることは、日本の初期音楽留学生の実態を明らかにするだけではなく、これまで述べてきた日本の洋楽受容におけるハリストス正教の影響を考える上でも有益であると思われる。冒頭で触れたとおり、この「帝室付カペーラ声楽院」は、現在のサンクト・ペテルブルグ国立アカデミーカペラ、**Государственная академическая капелла Санкт-Петербурга**, の附属学校である。インターネット上に掲載された同校の歴史資料を入手することにより、この学校における合唱指導者教育の様子や、金須が学んだ当時の状況が明らかになってきた。以下、その史料を紹介する形で記述する。

4. 「帝室付カペーラ声楽院」

帝室附カペーラ声楽院²⁴⁾、現在のサンクト・ペテルブルグ国立アカデミーカペラ、

Государственная академическая капелла Санкт-Петербурга, の附属学校は、15世紀から始まる歴史を持ち、ロシア帝国の合唱教育の「総本山」的存在である。基本的には合唱団員の養成校であるが、19世紀になって合唱指揮科と器楽科が設置された。これについては、同校卒業生と関係者によるグループが運営するウェブサイトに資料が掲載されているので、以下、それに基づいて記述する²⁵⁾。

合唱指揮科については、1848年に同科3コースの入学希望者の入学要件が公布された²⁶⁾。この合唱指揮科は1884年に「きちんとした音楽教育」を与えるために改組されたが²⁷⁾、その目的は、もともと音楽的な知識に乏しい神学校の唱歌教員や合唱指揮者たち²⁸⁾に高度な音楽教育を施す²⁹⁾ことであり、ロシア全国の教会合唱の質の向上と統一³⁰⁾を図ろうとしたものだった。それは次の引用文からも明らかである

традиции хорового пения придворной капеллы проникают по всей России, придворное пение становится обязательным для всех архиерейских хоров, регентами которых могут быть лишь лица, получившие аттестаты из Придворной Капеллы.

帝室カペーラの合唱の伝統がロシア全土に行き渡り、すべての教会合唱に帝室カペーラの有資格者のみが指導出来る帝室（の唱法）が義務づけられる³¹⁾

こうした動きが出たのは、当時の神学校の唱歌教員の多くが、きちんとした音楽教育を受けていなかったことによる³²⁾。ロシア正教上層部の働きかけをよそに、歌の練習に時間を取られるのは本業の邪魔であるかのような考え方をなかなか変えることができず、聖職者自身による合唱軽視の問題が指摘されていたのである。

Многие из духовенства и особенно высшие

духовные власти делают всевозможное к тому, чтобы церковное пение развивалось и процветало, но в массах еще не скоро отрешатся от взгляда на пение, как на занятие, мешающее «главным предметам».

(聖職者みんながそうだとするわけではないし)、教会の上層部は教会歌唱の発展と開花の為に出来る限りのことをしているのだが、大半（の一般聖職者）は唱歌が「主要科目」の邪魔になるという見解をなかなか捨てられない³³⁾

日本の正教会合唱の黎明期に多大な貢献をした前出のヤーコフ・チハイやディミトリー・リオフスキーが学んだベッサラビア地方キシニョフ³⁴⁾の神学校³⁵⁾でも、唱歌は課外科目との位置づけ³⁶⁾であった³⁷⁾。

この合唱指揮科が設置されたのちも、このコースのための外部予算や寄付をほぼ得られず、財源は生徒からの授業料のみであった³⁸⁾。そのためロシア中から生徒が集まったとは言え、裕福な地元の生徒か、地方教会に派遣された生徒以外には「高嶺の花」でしかなかった。どのような生徒が集まっていたかは、次の記述から察することができる。

Большой процент — составляют полковые певчие, по преимуществу из Петербурга, посылаемые начальством на казённый счёт. Остальные — труженики из провинциальных хоров, мелких и крупных, приехавшие учиться большею частью на последние гроши, чтобы по окончании курса снова возвратиться к своему незавидному положению.

大半は近隣、特にペテルブルグの合唱隊員で、公費で派遣されている。それ以外はいろいろな規模の地方の合唱勤務の、なけなしの金をはたいてこのコースに来ている人たちで、コースが終われば元の職に戻ることに

なっている³⁹⁾

1848年当時の入学要件は、「18-20歳程度かそれ以上で、ある程度の楽譜の知識と教会合唱経験があり、きちんとした服装、音叉、使用可能なヴァイオリンと楽譜代として10-30ルーブル⁴⁰⁾を持っていることであつた。入学者の多くは神学校か神学大学の出身者だったため、高等教育の卒業証明が必要というよりは、合唱指揮を学ぶこと自体が目的だった学生が多い⁴¹⁾。こうした背景をもって教育が進められたカリキュラムが、どちらかと言えば個人教授的なものから、きちんと整備された厳しいものになったのは1884年からであり、これは当時副院長であつたリムスキー＝コルサコフによるものであつた⁴²⁾。

с 1884 г. регентский класс получил уже определённый характер строго музыкального учебного заведения с выработанною, на основании предшествовавшего долголетнего опыта по обучению регентскому делу специалистами духовного пения и теории музыки, программю, ... так что по объёму своему полный курс регентского класса равняется консерваторскому курсу по специальности теории музыки с присовокуплением специальных знаний в области церковной музыки.⁴³⁾

1884年になると、合唱指揮科は教会合唱と音楽理論の専門家の長年の経験に基づいた、しっかりしたカリキュラムを持ち、きちんとした音楽学校の性格を帯びていた。そのため、全コースを履修すると音楽院相当の音楽学知識と教会音楽の専門知識を得られた。

同校はその後20年間に、帝室カペラ団員出身者から素人までを含む3段階475名の修了生を送り出している⁴⁴⁾。日本の正教会学校で学び、

既にロシア人教会合唱指揮者のアシスタントをしていた仙台出身の金須嘉之進もその1人で⁴⁵⁾、ロシア側の資料でも当時日本から来た教会合唱指揮者がいたことに言及されている。

Тут можно встретить регентов из всех почти русских городов; есть регенты из Сибири, Кавказа, из Сербии, Черногории, были регенты из Японии.

そこではロシアのあらゆる地域から来た合唱指揮者に出会い、シベリア、コーカサス、セルビア、チェルノゴリーヤ、それに日本から来た指揮者たちもいる⁴⁶⁾

時代背景を鑑みると、これが金須であることはほぼ間違いないと思われる。当時日本からは、同じ神学校出身の複数の日本人信徒がキエフ神学大学等に留学していたが⁴⁷⁾、正教会の合唱指揮科に留学した日本人は金須が最初と考えられる。

金須が滞在した期間（1891-94）、70年代から日本の教会合唱を指導したヤーコフ・チハイは1886年にオデッサに渡ったのち、同地で既に死去していたが、ペテルブルグにはチハイの兄で1890年に帰国したアナトリーがいた。おそらく、金須には滞在しやすい時期だっただろう。金須は12-13歳頃から仙台で正教会の音楽に親しみ、東京でロシア人から音楽を学んだ教会員に毎週拍子や音程を習っていた。そして15歳で東京の神学校に入り、正式にソルフージュの指導を受けている⁴⁸⁾。

金須が学んだ頃のカペーラ声楽院付属学校には、当時合唱団員養成の本来のコースに加え、合唱指揮科、器楽科、演劇科等があった。器楽科はいわゆるソリストとなるような演奏家養成ではなく、初見ですぐ弾けるオーケストラ団員の養成を目指していた。

который именно подготавливает отличных музыкантов для оркестра, музыкантов вполне знакомых с теорией и не отставших и в отношении техники...

Нам не нужны подготовленные виртуозы-фокусники, живые куклы-марионетки; давайте нам, повторяю, опытных, хороших музыкантов для оркестров, которые бы прежде всего в состоянии были без приготовления прочесть партитуру

すばらしいオーケストラ団員、音楽理論に精通し、テクニックによどみがない優秀な音楽家を育てるというコースの目的にかなう方がずっといい。中略…我々にはヴィルトゥオーゾ、生きた人形になる訓練は必要ではない。経験豊富、初見で弾ける良いオーケストラ団員になろう⁴⁹⁾。

金須が学んだ時代のカリキュラムは、ニコライ・リムスキー＝コルサコフによって作られており、音楽的に教育された合唱指揮者の養成を目的として、以下の科目を置いていた：

（演奏家養成の）音楽院と同等の音楽理論、和声学、対位法、フーガ、音楽史、ソルフージュ、教会唱歌、宗教作品と一般作品の編曲、移調法、作曲、合唱指揮実習、スコアリーディング、教会規律、ヴァイオリン、ピアノ⁵⁰⁾

その背景には、ロシアの合唱指揮者たちの中に本格的な音楽教育を受けてきちんとした知識を持つものが少ないという認識があった⁵¹⁾。また当時の学生の中には、小学生相当の年齢の生徒も含まれていたようである⁵²⁾。この声楽院の授業で学んだ音楽は次の記述から明らかになる。

гораздо успешнее достигается цель класса,

мы исполняли хоры из «Св. Елизаветы»

Листа, его же «Прометей», ораторию Берлиоза «Бегство в Египет» и многое другое.

リストの「聖エリザベータ」、「プロメテウス」、ベルリオーズのオラトリオ「エジプトへの逃避」等々演奏した

от симфоний Гайдна, весёлых и певучих, а затем Моцарта, через бойкие увертюры «Сорока-воровка», «Весталка», «Вильгельм Тель» и др., перешли, наконец, к первым двум симфониям Бетховена.

ハイドンの交響曲から、愉快的な曲、歌唱的な曲、それからモーツアルト、どろぼうかささぎ、ヴェスタの巫女、ウイリアム・テル、等々、ついにはベートーヴェンの1番と2番の交響曲もやった

по рукописи прозвучали почти все симфонические произведения Римского-Корсакова, весь без исключения Глазунов и многие сочинения Балакирева, Бородина, Мусоргского, Чайковского, Кюи. Короче — вся наша русская, ставшая теперь классической, симфоническая музыка.

リムスキー＝コルサコフのオーケストラ作品ほとんど全部、グラズノフの作品すべて、バラキレフ、ポロディン、ムソルグスキー、チャイコフスキー、キューイも沢山手書きの楽譜が音になった。要するに、今や我々のロシアクラシック作品のすべての交響作品である⁵³⁾。

このように、宗教作品の他、リスト、ワーグナー、ベルリオーズと言った一般の作品も扱っていた。そして合唱で重視されるべき点としては、「模範的な正確な音程、演奏と歌詞の両面で最大限の表現（歌詞の明瞭さ）」などであり、さらに、「全体にとけ込む」ことが最も重要と考えられていた。

Помимо образцовой чистоты интонации и предельной выразительности как в выполнении знаков, так и в дикции... , этот метод ещё заключался (и в этом вся суть) в идеально выровненном пении, при наличии которого ни в forte, ни в piano ни один из голосов не выделялся из общей хоровой массы. Таким образом, получалось своеобразное органное звучание, однако, без его мертвенного, механического тембра.

非常に正確な音程と音楽と言葉両方の極上の表現に加えて、このメソードにはさらに、強弱も各声部も、決して全体から突出しないと、いうアカペラ合唱の理想の水準があった。そしてオルガンのものでいて、機械的ではない独特の音響を持っていた⁵⁴⁾。

こうした演奏方法は、大切に受け継がれるべきものとして認識されている。

особый, издавна установившийся метод хорового пения, передаваемый из поколения в поколение. Регентов «со стороны», как правило, не брали, и таким образом старинная традиция исполнения устойчиво и свято хранилась.

特別の、長年にわたって確立されたメソードが世代から世代へと受け継がれた。外部からの指揮者は採用されない決まりだったので、この古い伝統がしっかりと神聖に守られた⁵⁵⁾

ここに見受けられるような、古くから確立され、世代から世代へと受け継ぐメソードとして大切にされるこの点は、ロシア系正教会の合唱の極意と一致する。

当時のロシアには、この学校と同時期に、著名なピアニストであるルビンシテイン (A Rubinstein 1829- 1894) ⁵⁶⁾ が創立したサンク

ト・ペテルブルグ音楽院⁵⁷⁾も存在したが、この両校には、兼任または両方で教えたことのある教師が多かった。金須が在籍した時代、声楽院付属学校の院長はバラキレフ、副院长リムスキー＝コルサコフだった。リムスキー＝コルサコフは、1891年の改組の際に音楽教育としての実用性を考慮し、聖職者出身の教師より専門の音楽家を重用するとともに、音楽院のリヤードフ、作曲家のソコロフ、音楽理論のヴィシネフスキーらを招いている。

Недавно (в 1891 г.) тем же г. Римским-Корсаковым программа была видоизменена ввиду большего соответствия с практической постановкой дела.вдобавок к прежним учителям, зарекомендовавшим себя успешным преподаванием, были приглашены новые лица, зарекомендовавшие себя на музыкальном поприще.

最近 (1891) 同じリムスキー＝コルサコフが、更なる実用性を狙ってカリキュラムを変更した…音楽家として有名な人たちが新しく教員として招かれた⁵⁸⁾。

結びにかえて

仙台出身の金須嘉之進が学んだのは、このような学校だった。革命前のロシアの合唱指導の名門校でロシア人と同じカリキュラムを学び、修了したことになり、当時の日本では明らかにトップレベルの音楽教養と指導力を身につけていた可能性が高い。金須は当時の一流音楽家であったリムスキー＝コルサコフに直接教えを受け、バラキレフ、ルビンシテイン、グラズノフ等ロシアの著名作曲家たちとも間近で接して来ている。金須の音楽指導は厳しいことで有名だったが、その背景に若い頃に一流音楽家の薫陶を受けたこともあったのかもしれない。

金須嘉之進については、その経歴もふくめた実績がこれまできちんと検証されてきたとは言

い難い。日本が西洋音楽を受け入れたプロセス、あるいは日本で西洋音楽が発達していったプロセスは、東京音楽学校を中心に語られることが多く、ハリストス正教による音楽の影響になかなか目を向けられて来なかったことも事実である。これからさらに関連資料の掘り起こしを進める中で、西洋音楽が日本に根付いた経緯の全体像を検証し直す試みが必要であり、本稿の第一義は、これまで注目されていなかったロシア関係資料を掘り起こした点にあると考えている。それに加えて、金須の存在やその影響を東北の近代化や文化の歴史のなかで考えていく可能性についても言及しておきたい。東北の近代史におけるハリストス正教の影響力については、山下須美礼の諸研究をはじめとして近年明らかにされて来ている。しかしその中に洋楽受容の視点はこれまでほとんどなかったと言って良い⁵⁹⁾。山下が明らかにしたように、戊辰戦争敗退後の仙台藩士たちは新しい思想としてハリストス正教を受け入れた。その中で育った金須の存在は、布教過程への影響も含めて東北史の視点からも興味深い存在と思われる。すなわち、金須はこれから近代洋楽受容史の範疇にとどまらず、近代東北史との双方に関わる存在として検証する意義があるのではないかという指摘をして本稿の結びとしたい。

付記

本稿成立にあたっては、奈良教育大学名誉教授の安田寛氏と帝京大学文学部准教授の山下須美礼氏の協力をいただいた。記して謝意を表す。また本稿は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B)「近代移行期における「音」と「音楽」—グローバル化する地域文化の連続と変容—」(課題番号15H03232、2015.4-2018.3)の助成を受けた研究成果の一部である。

- 1) 日本で通常ハリストス正教と称されているのはロシアから伝来した東方正教である。東方正教の日本への伝来を研究した山下須美礼は、教派の種類である「東方正教」とその組織である「ハリストス正教会」とを区別して論述している(山下須美礼『東方正教の地域的展開と移行期の間人像』(清文堂、2014) p6-7参照)。しかし洋楽受容史においては「ハリストス正教」とされて来たことから、本稿ではこの名称で統一する。
- 2) この3つにさらに雅楽寮伶人たちによる洋楽も加えた4つをあげる考え方も存在する。
- 3) ルーサー・ホワイトニング・メソン(Luther Whiting Mason, 1818年4月3日 - 1896年7月14日)
- 4) 中村理平『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説—』(刀水書房、1993)、中村理平『キリスト教と日本の洋楽』(大空社、1996)、安田寛『唱歌と十字架』(音楽の友社、1993)などがあげられる。
- 5) 大嶋かず路「明治期日本におけるロシア音楽受容：正教会と音楽学校の功績およびその影響関係について」『上智ヨーロッパ研究』(6)、2014、p165-189
- 6) Lucy H. Ing, (1837-1881) 女性宣教師を輩出したマサチューセッツ州の名門女子校マウント・ホリヨークで学び、メソジスト派宣教師ジョン・イングと共に1874年12月から1878年3月まで弘前の東興義塾で主として女子教育を担当した。その一方で、ジョン・イングとともに弘前でのキリスト教布教に従事した。
- 7) 松島純子「ニコライ大主教と日本の聖歌」p7-8. これは『正教時報』に連載されたものだが、現在ウェブ上で閲覧可能である(<http://www.orthodox-jp.com/maria/hismeiji.htm>)。ハリストス正教と聖歌についてきわめてわかりやすく述べられている。
- 8) 中村理平『キリスト教と日本の洋楽』(大空社、1996) p84
- 9) 音程を揃えて集団で歌ういわゆる合唱の形態は、近代の洋楽とともに日本に入って来たものであり、それ以前にそうした習慣がなく、さらに西洋音楽に馴染みがなかった当時の日本人にとっては、合唱すること自体がたやすいことではなかった。
- 10) 大嶋かず路「明治期日本におけるロシア音楽受容：正教会と音楽学校の功績およびその影響関係について」『上智ヨーロッパ研究』(6)、2014、p165-189
- 11) 中村理平『キリスト教と日本の洋楽』(大空社、1996) p86
- 12) 山下須美礼『東方正教の地域的展開と移行期の間人像 北東北における時代変容意識』清文堂、2014
- 13) 山下須美礼『東方正教の地域的展開と移行期の間人像 北東北における時代変容意識』清文堂、2014
- 14) 山下須美礼『東方正教の地域的展開と移行期の間人像 北東北における時代変容意識』(清文堂、2014) p66
- 15) Methodist Episcopal Church, ed., *Annual Report of the Missionary Society of the Methodist Episcopal Church for the Year 1894*, p.209.
- 16) なお、弘前藩の場合は地方知行制ではなく蔵米知行制だった。
- 17) 仙台藩士たちがどのように聖歌を受け入れ、どのように苦勞しながら歌に取り組んだかということについては、稿をあらためて発表する予定である。

- 18) 例えば、1881年5月20日のニコライの日記には、当時中川姓だった嘉之進少年が聖歌隊を指揮していることが記されている。
- 19) 中村理平の記述では「ペテルブルグ音楽院」となっている。(中村理平『キリスト教と日本の洋楽』(大空社、1996) p98)
- 20) 中村理平『キリスト教と日本の洋楽』(大空社、1996) p98
- 21) 平高典子「幸田延のボストン留学」『論叢』玉川大学文学部紀要54、2013、p191-211、平高典子「幸田延のウィーン留学」『論叢』玉川大学文学部紀要53、2012、p101-121、亀田帛子「瓜生繁子断章 - 東京音楽学校時代を中心に」『津田塾大学紀要』24、1992、p1-16、などがあげられる。
- 22) 手塚晃・国立教育会館『幕末明治海外渡航者総覧』(柏書房、2004)
- 23) 金須嘉之進「ペトログラーヴ音楽院の憶ひ出」『月刊楽譜』23、3月号、昭和9年、p55
- 24) この名称は金須嘉之進本人の訳による(金須嘉之進「ペトログラーヴ音楽院の憶ひ出」『月刊楽譜』23、3月号、昭和9年、p54-56)
- 25) <http://kapellanin.ru> および Р[аппопрт] М. Инструментальный класс при придворной певческой капелле // Театральный и музыкальный вестник.— 1860, 22 мая, № 20.— С. 160–161
<http://kapellanin.ru/misc/instr/timv1860/0160/> 参照 なお、本稿で紹介するロシア語文献の日本語訳は城元智子が担当した。
- 26) В 1848 году ...были обнаружены условия для поступления в капеллу лиц, желающих обучаться регентскому делу, причём было учреждено три курса: (1848年に合唱指揮科3コースの入学希望者の入学要件が公布された)
- なお、以下、注26から注31までの出典は、次のウェブサイトに掲載された情報による。
(Регентский класс при Придворной Певческой Капелле // Русская музыкальная газета.— 1904, 9 мая, № 19-20.— С. 516–519 <http://kapellanin.ru/misc/rmg/1904/0516/>)
- 27) Для того, ...поднять и утвердить регентское образование на других более рациональных началах, ...и с сентября 1884 г. введено в действие (合唱指揮者教育の質向上とともっと合理的できちんとした教育が1884年に発効した)
- 28) церковное пение в России очутилось в руках недоучек (ロシアの教会合唱は、中途半端に教育された指揮者たちに任せられていた)
- 29) полный курс регентского класса равняется консерваторскому курсу по специальности теории музыки с присовокуплением специальных знаний в области церковной музыки. (合唱指揮科の正規コースは、音楽院楽理科と同等の水準に教会音楽の専門知識を加えたもの)
- 30) объединению и упорядочению церковного пения в России (ロシアにおける教会歌唱の整備と統一)
- 31) Регентский класс при Придворной Певческой Капелле // Русская музыкальная газета.— 1904, 9 мая, № 19-20.— С. 516–519 <http://kapellanin.ru/misc/rmg/1904/0516/>
- 32) Учителя по пению в Духовных Семинариях и училищах большею часть. Люди музыкально необразованные. (神学校の唱歌教師のほとんどは、きちんとした音楽教育を受けていない人た

ちだった)

Во многих случаях духовенство не оказывает надлежащего внимания к распространению истинного церковного пения. (多くの聖職者が、きちんとした教会歌唱の普及にあまり注意を払っていなかった)

(До-ре-ми- соль. Несколько слов в защиту Регентских классов и о средствах распространения истинного церковного пения // Русская музыкальная газета.— 1896, Январь, № 1.— С. 75–80.

<http://kapellanin.ru/misc/rmg/1896/0075/>)

33) (注32の出典参照)

34) 現在のモルドヴァ共和国キシナウ

35) (名称: Seminarul Teologic din Chisinau, Кишинёвская духовная семинария 1813年ロシア正教会によって創立され、創立当初から現地語(モルドヴァ語)の使用が認められていた)

36) În afară de aceste obiecte se preda limba ebraică, cântul bisericesc, iconografia și gimnastica.

37) Scutaru 2012, <https://ortodoxism.wordpress.com/seminarul-teologic/>

38) К сожалению, никто ничего не жертвовал на регентские классы (исключение сделал, если не ошибаемся, Г. Я. Ломакин). 残念ながら合唱式のクラスには何の寄付もない(間違いでなければGロマキンは例外)

39) (注32の出典参照)

40) не моложе 18–20 лет, должен быть снабжён приличною одеждою, скрипкою со смычком, камертоном и деньгами от 10 до 30 р.— на покупку нот; от него требовалось знание нот и известный опыт в церковном хоровом пении. (регентский класс при Придворной Певческой Капелле // Русская музыкальная газета.— 1904, 9 мая, № 19-20.— С. 516–519 <http://kapellanin.ru/misc/rmg/1904/0516/>)

41) Некоторые из них окончили курс в средних учебных заведениях (Духовной Семинарии); были кончившие университет и Духовную Академию, не нуждающиеся в дипломе и поступившие в регентские классы исключительно из любви к церковному пению. Пособий ученикам никаких не оказывается. ((入学者の) 一部は神学校中等教育修了、一部は進学大学卒業で、学歴(の修了証)を必要としていたわけではなく、純粹に教会合唱が好きだからこのコースに来た(До-ре-ми- соль. Несколько слов в защиту Регентских классов и о средствах распространения истинного церковного пения // Русская музыкальная газета.— 1896, Январь, № 1.— С. 75–80. <http://kapellanin.ru/misc/rmg/1896/0075/>)

42) До-ре-ми- соль. Несколько слов в защиту Регентских классов и о средствах распространения истинного церковного пения // Русская музыкальная газета.— 1896, Январь, № 1.— С. 75–80.

43) Регентский класс при Придворной Певческой Капелле // Русская музыкальная газета.— 1904, 9 мая, № 19-20.— С. 516–519 <http://kapellanin.ru/misc/rmg/1904/0516/>

44) С 1886 г. по 1904 окончили и получили аттестаты регентского класса Придворной Капеллы: 475 человек. (1886年から1904年の間に合唱指揮科の修了証を得た者が475名に上った) Регентский класс при Придворной Певческой Капелле // Русская музыкальная газета.— 1904, 9 мая, № 19-20.— С. 516–519

- <http://kapellanin.ru/misc/rmg/1904/0516/>
- 45) 金須嘉之進「ペトログラーヴ音楽院の憶ひ出」『月刊楽譜』23、3月号、昭和9年、p54
- 46) До-ре-ми- соль. Несколько слов в защиту Регентских классов и о средствах распространения истинного церковного пения // Русская музыкальная газета.— 1896, Январь, № 1.— С. 75–80.
<http://kapellanin.ru/misc/rmg/1896/0075/>
- 47) 金須嘉之進「ペトログラーヴ音楽院の憶ひ出」『月刊楽譜』23、3月号、昭和9年、p54
- 48) 金須嘉之進「ペトログラーヴ音楽院の憶ひ出」『月刊楽譜』23、3月号、昭和9年、p54
- 49) P[аппопорт] М. Театральная и музыкальная летопись // Сын Отечества.— 1863, 2 мая, № 105.— С. 809–810.
- 50) была выработана Н. А. Римским-Корсаковым подробная программа регентских классов, в которой, по возможности, обращено внимание на все стороны регентского и певческо-учительского дела: теория музыки, гармония в довольно широком объёме, контрапункт и fuga, история музыки, сольфеджио, равное курсу консерваторий, церковное пение, аранжировка духовно-музыкальных сочинений, переложения, сочинения, хоровой класс (для регентской практики), чтение партитур, церковный устав, игра на скрипке и фортепиано — всё это вошло в состав предметов Регентского класса, на всё обращено должное внимание.
リムスキー＝コルサコフが、音楽理論、かなり膨大な和声学、対位法とフーガ、音楽史、音楽院と同等のソルフェージュ、教会唱歌、宗教曲と一般音楽の編曲、作曲、編曲、合唱授業（指揮の実習）、スコアリーダー、教会規律、ヴァイオリンとピアノの演奏、といった、合唱指揮と唱歌教授法のあらゆる要素をふまえて、合唱指揮科の（新しい）カリキュラムの詳細を公表した。（До-ре-ми- соль. Несколько слов в защиту Регентских классов и о средствах распространения истинного церковного пения // Русская музыкальная газета.— 1896, Январь, № 1.— С. 75–80.
<http://kapellanin.ru/misc/rmg/1896/0075/>
- 51) образованных регентов в России мало, что есть много регентов, которые «не знакомы с педагогическими приёмами своего дела» — это верно.
ロシアには音楽教育を受けた合唱指揮者が少なく、きちんとした知識のない合唱指揮者が沢山いる —これは確かだ（До-ре-ми- соль. Несколько слов в защиту Регентских классов и о средствах распространения истинного церковного пения // Русская музыкальная газета.— 1896, Январь, № 1.— С. 75–80.
<http://kapellanin.ru/misc/rmg/1896/0075/>
- 52) уже в 13 лет, то есть на третий год по началу занятий, (13歳、つまり入学して3年目) Золотарёв В. А. Н. А. Римский-Корсаков в Певческой капелле. Из воспоминаний ученика // Советская музыка.— 1948, Ноябрь, № 9.— С. 52–56. ただし36頁に記載した1848年の入学要件からわかる通り、これら若年の学生たちは、合唱指揮科ではなかったようである。
- 53) Золотарёв В. А. Н. А. Римский-Корсаков в Певческой капелле. Из воспоминаний ученика // Советская музыка.— 1948, Ноябрь, № 9.— С. 52–56.
<http://kapellanin.ru/names/zolotarev/rim-kor.php>
- 54) Золотарёв В. А. Н. А. Римский-Корсаков в Певческой капелле. Из воспоминаний ученика //

-
- Советская музыка.— 1948, Ноябрь, № 9.— С. 52–56.
<http://kapellanin.ru/names/zolotarev/rim-kor.php>
- 55) Золотарёв В. А. Н. А. Римский-Корсаков в Певческой капелле. Из воспоминаний ученика // Советская музыка.— 1948, Ноябрь, № 9.— С. 52–56.
<http://kapellanin.ru/names/zolotarev/rim-kor.php>
- 56) ベサラビア地方に生まれた世界的ピアニスト。ヨーロッパで学び、ペテルブルグに音楽院を設立。19世紀末に来日した日本の御雇外国人ケーベル (R von Koebel) がモスクワ音楽院で師事したニコライは弟。
- 57) Санкт-Петербург 音楽院 (St Petersburg Conservatory)
- 58) До-ре-ми-соль. Несколько слов в защиту Регентских классов и о средствах распространения истинного церковного пения // Русская музыкальная газета.— 1896, Январь, № 1.— С. 75–80.
<http://kapellanin.ru/misc/rmg/1896/0075/>
- 59) この点については、ハリストス正教を受容した仙台藩士が礼楽思想の一環として音楽を捉え、聖歌に取り組もうとしていたことを示す史料に着目し、『国史研究』143号に史料紹介として上梓した。(北原かな子・山下須美礼「旧仙台藩士小野莊五郎の音楽論—「音曲ノ不正ハ人民ノ品行ヲ乱ル」—」『国史研究』143号、国史研究会、2017)

(UCL Institute of Education, London しろもと ともこ)
(青森中央学院大学 看護学部 教授 きたはら かなこ)